

ピーマン（トンネル早熟・普通）

栽培歴

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
作型										
トンネル早熟	ハウス		トンネル							
	は種				定植	収穫				

栽培の特徴とポイント

ピーマンは高温を好み、水分を多く必要とするが過湿に弱い。そのため、排水性が優れるとともに、かん水を行いやすいほ場を選定する。

品種

1 穂木

- 京みどり : 中早生タイプで、草勢は強い。果肉は「ニューエース」より薄い。
(タキイ種苗)
- エース、ニューエース : 中獅子タイプ。極早生で、果肉がやや厚い。果実は「エース」がやや長い。
(タキイ種苗)
- ベルホマレ : 疫病、TMVに抵抗性。「ニューエース」より草勢が強く、分枝数も多いため、
(長野県原種センター) 良果収量が多い。果実は「ニューエース」に類似したベルタイプで、果肉の厚さがわずかに薄い。

2 台木（接木苗を栽培する場合）

- ベルホマレ : 病害抵抗性を活用するため、台木に用いる。

育苗管理

1 床土の準備

床土は病害虫発生のおそれがなく、通気性・透水性が良く、適度な肥料を含むものを用いる。使用する前にpH、ECを測定し、適正な値であることを確かめる。

2 育苗床の準備

育苗床は日当たりの良い場所に設置する。定植前には20cm×20cmに鉢間隔を広げることから、本圃10a栽培する場合は育苗床の面積が120㎡必要となる。

3 播種

10a当たり60ml程度の種子を用意し、地床あるいは箱に播種を行う。播種後は種子がかくれる程度に薄く覆土し、発芽するまで新聞紙等で覆い、乾燥を防ぎ保温する。

4 鉢上げ

鉢上げは、本葉2枚の時に、15cmポットに行う。鉢上げ後活着するまで、萎れる場合は、霧を定期的にかけて、加湿ぎみに管理を行う。

5 温度管理

発芽適温は、20 ～ 30 。昼温 30 で夜温 20 の変温処理が発芽促進効果が高い。

		は 種 床		育 苗 床		
		発芽前	発芽後	鉢上げ後 活着まで	活着後本 葉6枚まで	本葉7枚～ 定植まで
気温	昼温		28～30	28～30	25～28	25～28
	夜温		20～22	20～22	18～20	15～16
地温	昼温	30	25	27	24	22
	夜温	20	23	22	20	20

6 水管理

かん水は、育苗養土が過湿、過乾燥状態にならないように、土壌の湿り具合を確かめ、天候を考慮して量を定める。定植に近い苗は吸水量が増えるので、乾燥しないように注意する。乾燥すると、根傷みを起こす原因となり、逆に、過湿では根の生育が劣り、活着後に根傷みを起こしやすい。

7 追肥

追肥は、育苗後半、肥効が切れる前に、100ppm(プロ用ハイポネックス 20-20-20 の 2000 倍)～200ppm(プロ用ハイポネックス 20-20-20 の 1000 倍)程度の液肥をかん水の代わりに施用する。

8 ずらし、腋芽除去

育苗後半、倒伏しないように支柱を立て、となりの株と葉が重ならないように鉢間を広げる。第 1 分枝より下の腋芽は早めに摘み取る。

9 接木

接木方法は、トマトの接木に準じて行う。

本ば管理

1 ほ場の準備

排水が良く、耕土の深いほ場を選定する。定植予定の前年秋に、堆肥等の有機質資材を施用しておく。ほ場によっては、耕起後畝立ての間に降雨があると、砕土率が極端に落ちることがあるので、施肥、耕起、畝立ては、一連の作業として行う。

2 施肥・追肥

施肥例(kg/10a)

肥料の種類	総量	基肥	追 肥						成 分 量			
			1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	チッソ	リンサン	カリ	
完熟堆肥	2,000	2,000										
苦土石灰	100	100										
有機化成		200							16	16	16	
高度化成		100	20	20	20	20	20	20	28.6	28.6	28.6	
合計									44.6	44.6	44.6	

追肥は、1 番果の収穫始めの頃から窒素成分で 2 ～ 2.6kg/10a 程度とし、20 日間隔で施用する。

3 定植

表 栽植方法与栽植密度

栽 植 方 法		畝幅	株間
条数	仕立本数		
1	4	cm	cm
2	2	180	90 ~ 100
1	1	180	45 ~ 60
1	1	120 ~ 150	35 ~ 50

育苗期の樹勢が弱い場合や樹勢が弱い品種では、本葉 10 枚程度で、育苗時の樹勢が強い場合や樹勢が強い品種では、第 1 花が開花した頃に定植を行う。

ピーマンの栽培では、主枝 4 本仕立てによる栽培が一般的である。主枝 2 本仕立ては、単位面積当たりの総主枝数が主枝 4 本仕立てと同程度となるが、単収は増加する。これは、仕立て本数が少ないほど単位面積当たりの葉重、乾物重及び根数、根重が増加するとともに、葉は各茎の高さに均等に分布することから、光の吸収効率が高くなり、良質の花数が増え、収穫果数が増加するためである。主枝 1 本仕立てでは、収量を確保するため定植株数は多くなるが、単位面積当たり主枝本数は少なくなり、誘引作業等の管理作業が軽減できる。

4 整枝

主枝 2 本仕立て：第 1 分枝～第 2 分枝から出る、草勢の強い枝を 4 本誘引し、主枝として伸長させる。主枝は、150cm で摘心し、その後は摘心から 3～4 節下の側枝を伸長させ、主枝の更新を行う。各側枝は、3～4 個を着果させて摘心し、収穫後、1 節を残して切り戻す。

主枝 2 本仕立て：第 2 分枝の中の草勢の強い枝 2 本を誘引し、主枝として伸長させる。軒高が低いハウスでは U 字誘引を行い、170cm で主枝を摘心する。軒高が高いハウスでは V 字誘引を行い、200cm で主枝を摘心する。各側枝は、3 個を着果させて摘心し、収穫後、1～2 節を残して切り戻す。

主枝 1 本仕立て：第 3 分枝の中の最も草勢の強い枝を 1 本選び、直立に誘引し、主枝として伸長させ、その他の側枝は 4～5 個の着果後に摘心する。主枝は、170cm～190cm で摘心する。側枝は、2～3 個を着果させて摘心し、次の側枝には 2 個を着果させる。

5 摘葉

光が入らず、古くなった分枝後の本葉や、光を遮る側枝葉は、晴天の午前中に順次摘葉する。過度の摘葉は樹勢を乱すので行わない。

6 かん水

水分を多く必要とする品目であることから、多めのかん水を行う。かん水量は、土壌条件、気象条件、樹の大きさによっても異なるが、梅雨明け後は 1a 当たり 1000～2000 リットルを目安に行う。乾燥すると樹勢が低下し、尻腐れ果、日焼け果、果頂部に花弁が付着した奇形果が多くなるが、多かん水による湿害では奇形果が発生するので、かん水量には注意が必要である。

7 収穫

開花後から収穫までの日数は、品種、温度、着果数によって異なり、高温期で 20 日、低温期で 30 日程度を要する。

果肉が薄い品種では、30～35 g 程度で収穫を行うが、樹勢が弱い場合は早めの収穫を行い、樹への負担を軽くする。

病害虫防除

疫病：梅雨時期以降に発生しやすい。なす科及びうり科野菜との連作を避ける。高畝での栽培を行い、排水対策を徹底するとともに、マルチ等によるはね上がりを防ぐ。発病が懸念される場合は、品種「ベルホマレ」を自根栽培するか台木に用いる。

斑点病：梅雨期以降に発生しやすい。整枝せん定を徹底し、過繁茂状態にならないように管理する。発生初期までの防除を徹底し、発病が見られたら、被害茎葉は適切に処分する。

灰色かび病：多湿条件で発生しやすくなるので、換気を行う。花卉が果実に残っている場合は、摘除する。発生初期までの防除を徹底する。

白絹病：高温で多湿を好むことから、排水対策を徹底する。また、未熟な有機物は多施用しない。

アブラムシ類：5月頃から発生が見られることから、定植時からの防除を徹底する。

アザミウマ類：6月頃から発生が見られる。ハウス栽培では、防虫ネット(目合い0.6mm以下)を展張する。発生する種によって薬剤の効果が異なることがあるので、注意する。

タバコガ：6月頃から発生が見られ、8月～9月ににかけて多発生することがある。黄色蛍光灯の点灯は、被害防止効果がある。

ヨトウムシ類：6月頃から発生が見られ、10月頃まで続く。老齢になるほど薬剤の効果が低くなるので、初期の防除に努める。黄色蛍光灯の点灯は、被害防止効果がある。

販売のポイント

果肉の薄い品種が主流だったが、肉厚の品種も再び見られるようになった。果実の色は緑以外に、赤、オレンジ、黄、紫、黒等のカラーピーマンが流通している。これらは、調理方法や栄養価を考慮した販売が有効となる。

経営指標と技術目標

10a 当たり収量	4 t
A 品 率	9 0 %
kg 当たり単価	2 5 0 円
10a 当たり労働時間	6 0 0 時間